

エジプト文明



* 和田敏英収集史料526（45の5）「TUT-ANKH-AMEN（ツタンカーメン）」のうち、「ツタンカーメンの黄金のマスク」写真部分

解説

「エジプトはナイルの賜物」という言葉があるように、エジプトに古代文明が発達した大きな要因の一つに、ナイル川との関わりがあげられます。

すなわち、ナイル川が毎年夏に氾濫して出来上がった肥沃な土地を耕して農業が盛んになり、富が蓄積された結果、この地には小さな国がたくさん生まれました。これらの国々は紀元前3000年頃には、強大な権力をもった国王（ファラオ）のもとに統一されます。彼らは神のように敬われ、その権力の象徴としてピラミッドという巨大な墓が築かれるようになりました。一方、ナイル川が氾濫する時期を知るために天文学が発達し、太陽の動きを基準にした太陽暦が作られます。そして、記録するための手段としての象形文字（ヒエログリフ）も発明されました。

左の写真は、古代エジプト第18王朝（紀元前14世紀）のファラオであったツタンカーメンのミイラにかぶせられていた黄金のマスクです。科学的な調査の結果、彼は身長165cm（古代エジプトの成人男性の平均とほぼ同じ）で、体格はかなり華奢であり、19歳という若さで亡くなったと推定されています。死因は、大腿骨の骨折に起因する感染症とマラリアとの合併症による体調不良の悪化という説が有力です。

* 右の写真は、ギザのピラミッドとそれを守るスフィンクス（王の顔とライオンの体をもつ神聖な存在）です（和田敏英収集史料526（45の16）⑤「〔絵葉書〕（ギザのピラミッドとスフィンクス）」）。

